
異世界で黄門さま

いぬらぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で黄門さま

【コード】

N9622G

【作者名】

いぬらぶ

【あらすじ】

神様のミスで異世界に飛ばされた野上千佳はそこでどこかの黄門さまみたいに印籠をもって悪者をやっつけることに。そしてそこからむ神様の願い。

神様へ

私は何にも知らなかった。

私の住んでいた国には、八百万もの神様たちが住んでいて、

その神様たちが私たち地上に住むすべての人間の運命を管理して
いたなんて。

世界は神たちが創った箱庭だった。

そして私はその箱庭の中で、普通に高校を卒業して大学に進学し、
ある程度の会社で夫となる人と出会って、だいたい80歳くらいで
3人の自分の子供にみとられながら死ぬ・・・はずだった

2

でも私は些細なミスのおかげでその箱庭から追い出された。

そして箱庭の外に出た私は新たな役目を貰った・・・・・・・・

・・・ねえ、八百万の神様？

私は貴方たちを恨んでもいいですか？

だって、あんなミスがなかったら私はこんなことしないうすんだんだもの。

あんな思いをすることなんてなかったんだもの。

ああ、もう一度あの平凡な箱庭に戻りたい……。でもそれはもう叶わない夢。

はじまり

いつもの学校の帰り道。

でも、その日は少し歩くのがつらかった。

『ごめん・・・好きなやつができたんだ・・・』

いつも隣にいた彼がいないから。

思い出したら、また涙が出てきた。

少し止まって、目元を手で乱暴にぬぐった。

次の瞬間、腹部に鋭い痛みが走った。

続いて横からも。

・・・なんで・・・？

そのまま、倒れそうになったら今度は背中に何か刺さった。

よろよろと前に出たら、今度は私に迫ってくるダンパー・・・

そこで私の意識は途切れた。

『こんにちは』

「い・こんにちは」

急に、目の前にいる金髪の美女に話しかけられた。

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・」

チーン。

会話終了。

なんかしゃべってくれないかなあ。

目の前の名無しの美女さん・・・腰まで伸びた美しい金色の髪に緑色の目をしていて真っ白な深いスリットの入ったセクシーなドレスを着ている・・・は、机に頬杖をつけてこちらをジッと見つめてくる。

うつつ、何かミステリアスな雰囲気醸し出している美人さんにそんなに見つめられると同姓だというのに顔が赤くなっちゃうよ！あつ、何か鼻から垂れてきた・・・

『ちよつ、ちよつと大丈夫っ！？』

いきなり顔を赤くして鼻血と出した私にギョツとしたのが、目の前の美女さんが慌ててこちらに身を乗り出してきた。

ギャー！！来ないでください！！余計に鼻血が出てしまいます！！！！

そんな私の思いも届かず、彼女の美しい顔が私の目の前に来てしまった。

・・・もう駄目だ。

私は鼻から勢いよく鼻血を吹き出し、意識を失った。

意識を失う直前に見えたのは、血のせいで斑になったドレスだった・・・。

はじまり2

体を四方から鋭い痛みが襲った。

そしてよるめいた先には、赤だというのに突っ込んでくるダンブカ
|...|

!!!!!!

勢いよく身を起こす。なんだろう・・・すごく嫌な感じだ。

『ああ、やっと起きたのね。良かったわ。いきなり鼻血拭いて倒れちゃったから心配したのよ』

頭上から声が聞こえた。見上げるとそこには先ほどの美女・・・服は変わっていた。

すこし目を瞬いて周囲を見回す。目の前にはただ真白い空間が広がり、前にあるテーブルと椅子が合ってなくて変な感じだ。私が横たわっていた所にも何にもない、というか床もない。無重力というやつだろうか？

いまいち、わけがわからず問うような視線を美女に向けた。すると彼女は『座って』と、私を椅子に座るように言って、自分も向か

い側に座った。パチンと彼女が指を鳴らしたらいきなり目の前に紅茶らしき飲み物と色とりどりのお菓子が現れた。

『食べて』と言われたので恐る恐る、お菓子をつまんでみた。すごくおいしかった。

お腹がすいていたので、遠慮なくモグモグ食べていたら、彼女が話し始めた。

『さつきは、すごくびっくりしたわ。いきなり赤くなっと思ったたら、鼻血を出すんだもの。大丈夫？ああ、あと私の名前はヴァリアよ。よろしく』

「よ、よろしくお願いします？千佳です。あとさつきの鼻血は私の悪癖の一つです。ごめんなさい、ドレス汚しちゃって。」

そうなのだ。私は美女または美男子を見ると所かまわず鼻血を吹く、という悪癖を持っているのだ。この他にもまだ厄介な癖があるのだが、それは秘密だ。はずかしいから。

『厄介な癖ね。ドレスのことは別に気にしないで』

うう、いい人だ。美女あらためヴァリアさん。美人なうえに性格も良い・完璧じゃないか。・・・また鼻がムズムズ・・・

『また出てきたわよっ！？』

「う、ごめんなさい。ティッシュ突っ込んでもいいですか？」

ポケットに入っていたティッシュを丸めて鼻に突っ込む。すごく

間抜け面だろう。

そんなことよりさつきから気になってたことを聞かなきゃ。

「ここは、どこですか？私、さつきまで家に帰る途中だったハズなのに……」

そうだ。こんな所、来た覚えは全くない。早く家に帰ってテレビの再放送をみないと……。

ヴァリアさんはなんか言いにくそうに顔をしかめたが、私の顔を見て決心がついたのか話し始めた。

『ここは、ヴェロヘルダーナっていう世界の天界……つまり神が住む所よ。まあ、住んでいるのは私だけだけれど』

ヴェロヘルダーナ？というか神って、ヴァリアさんは女神さまだったの！？そうか、だからこんなにも美しい……じゃなくて！！

「天界ってそういうことですか！？それにヴェロヘルダーナって何！？？」

世界って、地球じゃないの！？

『ヴェロヘルダーナはあなたがいた世界……地球とは異なる世界なのよ。そして私がこの世界の神……』

「ちつ、地球じゃないんですか！？どうして……私……どうしてこんな所にいるの！？？」

「ちゃんと帰れるんですよね！？？」

勢いよく言った私の顔から、ヴァリアさんは顔をそらした。

なんだろう、すごく嫌な予感がする。

ヴァリアさんが口を開こうとした。でもヤダ・なんかすごく聞きたくない。

私は思わず目を瞑り、耳を塞いだ。

でもヴァリアさんの声は直接脳に届いて、耳を塞いでも無意味だった。

『ごめんなさい・・・あなたはもう帰れないの・・・』

体が震えた。すごく寒い・・・。

もう帰れないの・・・？どうして・・・？

「どうしてですか？なんで・・・なんで帰れないの!？」

涙が出てきたから少しくぐもった声になってしまった。

やだ、ヤダよ。帰りたい。

顔を蒼白にし、震えながら泣きだした私を気まずそうに見ながら、彼女は衝撃の一言をはなった。

『だって・・・あなたは・・・あっちで・・・死んだから』

「し、死んだ!?! どうしてっ……… あっ!」

そっだ……私たしか学校の帰りに刺されて……。

あれ?でもお腹痛くない……。

刺されたはずの腹部を触ってみるが痕もないし、痛くもない。

首を傾げているとまたヴァリアさんが話し始めた。

『思い出したのね……。そうよ、あなたは四方から刺されてよろけたときに突っ込んできたダンプカーにぶつけられてそのまま3km引きずられた揚句、踏切の中に置き去りにされて、今度は暴走した電車で轢かれてグチャグチャも、もういいです、話さないで』

なんつー悲惨な死に方をしたんだ、私。普通ありえないよ。今までそんなに恨み買った覚えもないし……。まあ、死んだってことはここは死後の世界なんだ。でもヴァリアさんはヴェロヘルダーナって言っただけか?

「あのう、私が死んだということは思い出したのですが、ここは天国または地獄なんですか?」

「違うわ。ここは異世界。死後の世界じゃないのよ。ここはヴェロヘルダーナの天界よ」

死後の世界じゃないのね。ていうか異世界だってさっきも聞いた

たな。

「死後の世界じゃないなら何で私はここにいるんですか？何で異世界に・・・？」

そつだ。なんで私はここにいるんだ。変だ。

『ああ、それはね・・・あなたが本来死ぬべき運命じゃなかったからよ』

ヴァリアさんはあっさりといった。

「死ぬべき運命じゃなかった・・・って、でも私死んでますよね。どうして？」

ヴァリアさん（女神さまなのにこんな呼び方で平気なのかな）は眉間を二本の指で押さえ、考えるポーズをとった。なんか言いにくそうに口をパクパクしている。

「なんか、とんでもないことなんでしょうか？」

『いや、そうじゃないのよ・・・でもなんだか言いにくくて。でも別に私のせいではないのだし、悩む必要もないか！』

なんか吹っ切れたように“うん”と一度伸びをしたヴァリアさんはとても晴れやかに言った。

『実はね、あなたの世界の神様のパソコンとかいう機会の入力ミスでその日の国民の1/3の不幸があなたに掛かったから死んじゃったのよ』

い。

どつやら私は単純なパソコン入力のせいで亡くなったらし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622g/>

異世界で黄門さま

2010年10月15日01時24分発行